

高坂喜緒

『これらを裏づける史料が無いのは、前記源五良宗景卒し、未亡人里登^{りとう}のとき宗景の妹喜緒^{きよ}他家に嫁していたが、沖田高坂家の嗣子若年のみぎり、しばらく実家にありて後見をつとめ、貴重資料を婚家に借用搬出、その婚嫁先の家、祝融氏の災にあったがためと見られる。』

(「高坂文書に対する考察」伊那 12(6)(433)、下平加賀雄著)

上記宗景の妹喜緒について調べてみた。その中で以下高坂家文書に注目した。

包紙「文化年中 五郎右衛門代 女琴浦 左と でいり書類一式」

(「伊那郡大草村高坂家文書」長野県立歴史館収蔵 4-42-234)、文化年中：1804 年~1818

1. 封紙で本文はないが反古紙となっている裏面は証文(土地の境界証文)が書かれている。
2. 喜緒(きお/きを)は琴浦の誤読・誤写の可能性が高い。「きんほ」→「きほ」→「きお(を)」
3. 女琴浦は、宗景の妹喜緒と同一人物ではないか。
4. 左とは、里登と同一人物ではないか。文化元年(1804)生まれ、文政 5 年(1822)高坂家入籍

【裏面の証文の翻刻】

此□境之後

東西南祖母[]

五郎兵衛林界限北者祖母田境沢限

字あさか

一 田御年貢米十壹俵三斗七升四合

此田境之後東ハ八郎右衛門式部田境并□□墓所

[]ハ八郎右衛門田境道限西北ハ畔置田境□

1. 婚姻に伴う書類包みであり、裏面の証文はその際に再利用された反古紙とみられる。
2. 東西南北の境を順番に説明する定型句である。
3. 文書に出てくる田地（字あさか：現在の赤坂・祖母田周辺）は、まさに高坂家の屋敷地

（日曾利）の至近にあった。「字あさか」は現在の赤坂に比定でき高坂家の居住地（日曾利）の近隣、「祖母田」は現地名としては消えたが、史料上は確かに存在していた小字である。因って、この反古証文は高坂家に直接関わる土地取扱い（境界確認・譲渡・年貢負担など）の裏書だった可能性が高い。

4. 包紙表の「女琴浦」との直接の婚姻関係は明記されていなくても、高坂家と同じ生活圏

『実際の土地利用証文が再利用されている点は偶然ではなく、リアル家の痕跡を残していると云える。』との判断に至った。

総合的に判断すると、高坂喜緒は飯島宿の豪商平沢家に嫁いたが、実子源五郎が実家の高坂家の養子になった後も高坂家で世話をしていたとみている。

(川端紅葉著 2025・12・18)